

# あずきミュージアム 10年の歩み前編

佐藤久泰技術士事務所代表 佐藤 久泰

## ●はじめに

姫路市にある回転焼のお店(株)御座候は、北海道産あずきをこよなく愛して製品作りをし、しかも私費12億円を投じて「あずきミュージアム」を11年前（2009.6）にオープンさせました。

僕は「あずきミュージアム」のオープン直後に訪問、取材させていただき、本誌No.56（2009.9）に、「姫路に世界初『あずきミュージアム』完成」として紹介させて戴きました。

前回の紹介で述べましたが、この「あずきミュージアム」は、(株)御座候の前社長である山田実氏の北海道産あずきに対するこだわりと20年来の思いから、あずき文化の伝統を継承・発展させることを目的に、綿密な資料収集計画に基づいて、全国各地であずき文化の調査を行い、建設・オープンさせたミュージアムです。

山田前社長が、「館内の構想企画は、大学の教授をはじめ、あずきの研究者など14名の企画チームで『どういうテーマで、どういう順番で配置するか』を丸3年かけて考えてきた」というほど、綿密な構想企画に基づいて建設され、「あずきミュージアム」周辺には、あずきの栽培と照葉樹林文化に係わるシイ、カシやタブノキ、ツバキなどが、自然石を配した池（川）とその周辺に植えられていることに圧倒されます。1、2階の展示物など資料の配置には、学術的にも大変貴重ですばらしい資料が良く検討・整理展示されているのです。



門を入ると照葉樹が出迎えてくれる



樹々を過ぎてミュージアムの入り口への橋を渡る

この「あずきミュージアム」が、オープンから10年が経過しましたので、その歩みについて、振り返ってみたいと思います。

オープン直後の8月から10年間継続した行事として「小豆博士のガイドツアー」をはじめとする年間行事を、「あずきミュージアム」発行の資料（2012年6月からはあずきミュージアム四季報「あずきのとびら」として主に春、秋に発行、行事開催資料）などから、恒例行事の活動を辿ってみたいと思います。

恒例行事紹介の前に、特記すべきことがあります。それは「あずきミュージアム」オープン直後の2009年11月24日に「第4回十勝小豆研究会」（会員資格は、小豆が好きで、会の趣旨に賛同する者）が、「あずきミュージアム」を1日貸切で会場として開催されたのです。当日は唯一の海外会員である中国黒竜江省農業科学院からの1名と全国から82名の方々が参加され、盛大に開催されました。あずき関係者は、一度は見学しておくべきミュージアムなのでということで、本誌No.56に紹介したこともあり、十勝小豆研究会に毎回参加されている方々が多数駆けつけてくれたのです。

「第4回十勝小豆研究会」の内容については、本誌No.58（2010.3）に「あずきミュージアムでの開催は大成功!!」と、詳しく報告しており、関心のある方はご覧戴ければと思います。



十勝小豆研究会長と黒竜江省農業科学院の何さん



懇親交流会風景

あずきミュージアムでは、受付を済ませて最初に迎えてくれるのは、マスコットキャラクターの「あずきさん」「豆太郎」「豆次郎」の3姉弟です。「あずきさん」は2012年のミュージアムキャラクターアワードで第1位に選ばれた人気キャラクターです。愛らしく素朴で涼やかな表情が感じられます。

「あずきさん」「豆太郎」「豆次郎」の3姉弟：豆太郎・豆次郎は、あずき



ミュージアムオープン前から存在しており、工場見学のしおりや映像作品「あんこうる劇場」等に登場していた名も無き3色のキャラクターでしたが、現在の「あずきさん」になるまでにはあずきミュージアムオープン準備の2007年頃、「あずきさん」

の原画を元十勝農試の岡田裕子さんに提案いただいたものに、現社長が身体や手足をつけてデザインし、「豆太郎」や「豆次郎」は、キャラクターのイメージを残すために目や形状がぐにゃっと曲がっていますが、あえて残したものだそうです。

### ●あずきミュージアムの恒例行事

ミュージアムオープン以後、継続して開催された行事には、「小豆博士のガイドツアー」「鏡開き」「あずき縁結び」「造園家・大北望氏の庭園ツアー」「夏休み特別企画」などがあります。それらの行事について、その内容などを次に紹介したいと思います。

### ●小豆博士のガイドツアー

2009年6月から10年間継続した行事に「小豆博士のガイドツアー」があります。ガイドツアーは、北海道在住の小豆博士（帯広畜産大学名誉教授で農学博士の沢田壮兵先生と、元北海道大学教授で農学博士の由田宏一先生のお二人）を、あずきミュージアム学芸員（2013年からはあずきミュージアムシニアキュレーターと呼称）として、土日祝日を中心に各3日程度、年間8回程度開催し、夏休みやゴールデンウィークには子どもさんを中心に1時間程度ミュージアムの展示物などを説明しながら案内し、いろいろな秘密を持つあずきの世界に誘うのです。

お二人によるガイドツアーは、「あずきミュージアム」の目玉となって、この10年間継続してきました。



小豆博士のガイドツアー案内ポスター

ガイドツアーの行程は、まず、入り口アーチから案内され、最初のコーナーは、「身近なあずき食品」の数々。次にざるに入った収穫直後のあずきと、みがきをかけたあずきを見比べ、実際に触ってみることができます。

さらに入っていくと、北海道十勝から運ばれた白樺の木々と、収穫後の「にお積」された小豆が、雄大な小豆畑のパネル写真とともに、十勝の香りを醸し出しています。先生からは昔はこのようにしてあずきを乾燥させていたと説明され、一同重労働だったのだと納得の場面も。このように実物にこだわって作られた展示物を見て、大変よく理解でき、参加者も十勝にいるような錯覚に陥ったようです。

白樺林を右に見ながら、次のコーナーは、「世界の小豆と日本の小豆」。掲示と実物展示のコーナーに案内されます。世界には80種余の食用豆があり、あずきは東アジア特有のマメで、世界で日本人が一人当たり一番あずきを食べていることや、あずきには沢山の種類があることが紹介されます。また、あずきの花はすべて黄色であること、種子の色は赤以外の色や大小があることを実物展示で見ることができ、他にもあずきの仲間などについても詳しく説明されていました。特にあずきの祖先はヤブツルアズキという野生種で、種子は本当に小さいことや、よいものを選んで長い間品種改良して今日の栽培種が出来上がったことなど、パネルに示してあることが、わかりやすく解説されました。

学習コーナーが設けられ、国内各地で栽培されているあずきが、いろいろな呼び名で親しまれてきたことなど、あずきのいろいろが学習できるようになっており、中学・高校生などの参加者には好適な学習材料となったようです。

次のコーナーは、「タイムトンネル」となっており、参加者は大きな壁画で46億年という気の遠くなるような昔、地球が誕生して、生命が生まれ、今日まで進化してきた過程を見ることができ、人が農耕で食料を生産するようになったのは、地球の歴史から見ると、わずか少し前のことだとの説明に、参加者は直ぐには納得できないようです。

次は「ジオラマ映像」の会場ですが、「あずきのルーツを追い求めて」の上映が約30分、長編映像の世界へと誘ってくれます。斜面と縦の立体的な2画面に映し出される大画面ハイビジョン映像は、小豆の歴史は日本文化のルーツを探すことと深くかかわることを教えてくれます。小学生には難しい

かもしれませんが、詳しく取材して編集されていますので、中学生以上には大変勉強になる内容です。午前3回、午後は12時20分から16時50分まで7回の上映があり、ガイドツアー参加者はガイドツアーが終わってからでも見る時間があります。

次のコーナーは、「照葉樹林文化とあずき」について、壁面に示してあります。カシヤクスノキ、ツバキのような照葉樹が、たくさん繁っている地域を照葉樹林帯ということや、ミュージアムの庭園に植えられている沢山の木々は、主にそれらを植えてあること、大昔を知る手がかりとして、遺跡に埋もれている種子や道具などをDNA分析で、さらに進んだ研究へと発展していることなどが説明されました。さらに進むと、中国南西部にある照葉樹林の山間に暮らす少数民族の壁面写真があります。文化のルーツが似ている事がわかる光景なので、参加者の多くは懐かしさを感じるでしょう。

次のコーナーでは、中央にそびえ立つ実物の10倍の高さという「エリモショウズ」の模型が現れます。畑では60cm程度の実物大と6mの模型とが展示され、見上げるとさすがに大きくリアルで迫力を感じさせる模型で、参加者は驚いたようです。

この「エリモショウズ」の大模型を背にすると、十勝平野に立っていると錯覚するほどの大きな小豆畑の四季の写真が12角形の壁を覆っています。十勝平野から日高の山並みを背景にし、広々とした小豆畑の春の種まきから、秋の収穫までの「小豆の一生」を大型の迫力ある写真でコーナーごとに示してあります。種をまく、芽ばえる、育つ（2面）、花開く（2面）、莢を付ける、熟する、刈り取る、実をとると順で示してあります。「種をまく」コーナーでは、種皮から水を吸わない、種子の中に幼芽と幼根、石豆についての説明など、図解した大きなアズキで説明されておりわかりやすくなっていますが、説明を聞くとより一層理解が進んだようです。

次に2階にあがり、中国少数民族・ミャオ族の<sup>ロ・ショウバシラ</sup>蘆笙柱を覗き見るところに案内されました。2階を一回りすると照葉樹林がいっぱいある、気持ちの良い蘆笙柱広場に出ます。そこでは蘆笙柱（中国広西県、何瑞祥製作）に触れ、先生の説明では、宇宙や生命の中心を表していて、てっぺんの鳥は真東を向いて太陽を呼び出すのだというのです。太陽信仰、鳥信仰のシンボルとなっており、大昔の人たちは、大きな樹木や柱を神様と交信するアンテナと考え、<sup>ヨリシロ</sup>依代と呼んで、田の神様を迎えたり、送ったりしたということです。

次いで、「野の花広場」に案内され、季節の野の花を楽しむことができます。そして2階の展示は、「エリモショウズ」の10倍模型の上部を中央にして、壁面に描かれた画、書を見ながら一回り、「美しい日本の四季と小豆食」について、春、夏、秋、冬の二十四節気をパネル壁面で見たあと、「赤の世界」に案内されました。韓国や中国の赤で出来た掛け軸や飾り、衣装などが飾ってあり、日本と韓国にみる赤い小豆の呪力を紹介、日本では小豆の呪力を得るため、お手玉の中に小豆を入れる、韓国では転宅すると小豆粥や小豆飯を食べるなどを説明されました。なぜ赤いあずきを作るようになったのかおわかりでしょうか？ 大昔の人たちは、赤い色は特別な色で、自分たちの幸福を守ってくれる力があると考えたからなのですが、中国や韓国では、おめでたいことの印や、魔よけなどにたくさんの赤色が使われて、日本と似ているところが多いことをこのコーナーでは詳しく説明しています。

その他、「人生の通過儀礼とあずき」、「あずきのフォークロア」、「民話とあずき」、「小豆の名前」コーナーなどがある事を紹介されました。

次は、大画面のついた「ミュージアムシアター」です。ステージと76席の固定した椅子席があり、あずきミュージアムのテーマ映像“自然がくれた贈りもの「あずき物語」”のハイビジョン映像を20分間楽しむことができます。照葉樹林の木々や山野草、地被類の植え込みや池、滝などの設計、施工を行った造園家さんが画面に登場しています。上映時間は午前11時から16時20分まで、各回20分間11回上映されており、ガイドツアー終了後にも各自自由に見ることも出来ます。

そのほか、「あずきの選別・製アーン工程」、「日本のあずき食 いま・むかし」、「あずきの栄養・世界のあずき食」、「コミュニケーション広縁」では、



沢田先生による「世界の小豆・日本の小豆」前で 由田先生による「小豆の花開く」前でのガイド

のんびりと外の照葉樹林を眺めたり、小豆の玩具遊びや、小豆クラフトコーナーであずきや大豆などの豆類を使ってクラフト体験が出来ることなどが紹介されました。

また、「クイズQ&Aコーナー」にパソコンがあり、クイズ（初・中・上級とある）に全問正解（館内をよく見て歩くと必ず答えが見つけれられる）すると、「あずき博士認定証」が戴けることを紹介され、約1時間のガイドツアーは終わりです。

2012年のゴールデンウィークに実施したガイドツアーに参加されたAさんとBさんに感想を聞くことが出来ましたが、「あずきが身近になりました、何でも聞ける先生で楽しかったです。子どもの頃、おはぎを作ってもらっていましたが、今は買っています」。Bさんは、「いろいろなイベントでおはぎを作ったりする意味がわかるようになりました、赤飯を炊飯器で炊いて食べます」などと感想をおっしゃっていました。

次号後編に続く